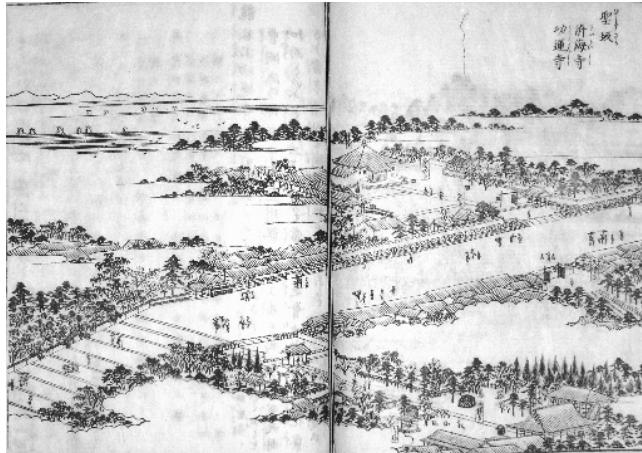


資料館だより

第 70 号
2012.10.1

特別展予告

江戸の大名菩提寺



「聖坂 济海寺 功運寺」(『江戸名所図会』より)

現代の港区域には、江戸時代に大名屋敷と寺院が数多くありました。その敷地は、現在の区域の7割程度を占めていました。これらの大名屋敷と寺院は、大名家が開基であったり、大名家の菩提寺であるというように、つながりの強いものでした。

これらの寺院は高い格式を持ち、諸大名の参詣なども頻繁に行われていました。そのため寺院内に独自の儀礼空間がありました。幕末には、その空間が外国人の接遇や滞在の施設として利用され、公使館的機能を果たすことになります。

この時代、多くの公使館的な施設が港区域に設けられたことが端緒となって、今日でも港区には多くの大使館が存在しています。大名菩提寺の存在は、現代のわれわれの生活にもつながるものでした。

また、港区教育委員会が昭和57年（1982）から開始した濟海寺の越後長岡藩牧野家墓所の調査は、江戸の大名墓研究の嚆矢とされています。近年では、大名墓・大名菩提寺に対する関心が高まり、文献史学・考古学の双方から研究の深化が図られています。

本展示では、濟海寺をはじめ、盛徳寺・大圓寺・東禪寺を中心に、大名菩提寺を「葬る」「詣でる」「納める」の3つの視点から紹介し、墓に収められた副葬品や寺院に奉納された経典・美術品、さらには大名家に残された参詣資料などから大名家と寺院の関係を見ていきます。

会期：平成24年10月27日（土）
～12月16日（日）

会場：港区立港郷土資料館

島津家のグレートマザー賢章院

— 新発見!! 島津家大奥奉納の経典 —

竹村 到

(文化財保護調査員)

現在、杉並区和泉三丁目に所在する泉谷山大圓寺は、曹洞宗の寺院で、江戸時代には芝伊皿子（現 三田四丁目）にありました。杉並区には、明治41年（1908）に移転しています。

創建は慶長元年（1596）と伝えられ、翌年に徳川家康より赤坂溜池に寺地を拝領しました。寛永18年（1641）の火災によって、芝伊皿子に移りました。寛文年間（1661 - 73）に入ると、薩摩藩主松平薩摩守（島津光久）の帰依によって、薩摩藩島津家の菩提所に定められました。薩摩藩の他にも、飯野藩保科家や交代寄合五井家の菩提所にもなっており、大きな寺院であったといえます。

今秋開催する特別展「江戸の大名菩提寺」のため、大圓寺ご住職のご協力を得て、大圓寺が所蔵する資料の調査を、杉並区教育委員会と共同で実施しました。調査した資料は、古文書類と経典類です。

大圓寺は、過去に複数の火災に遭い、激しい廃仏毀釈の影響もあって、江戸時代の資料は残されていないといわれてきました。しかし、今回位牌堂に、江戸時代の経典が残されていたことが確認できました。この経典の数は、全部で430点にもなりました。そのほとんどは、折本と呼ばれる形態のものです。



大圓寺位牌堂の経典

ここでは、島津斉彬の生母として知られる賢章院にかかる資料を中心に、調査成果の一端を簡単に紹介します。

賢章院は、彌姫（のち周子）といい、薩摩藩第10代藩主島津斉興の正室です。寛政3年（1791）12月に、江戸で生まれました。父は鳥取藩主池田治道、母は仙台藩主伊達重村の息女です。島津家には、文化4年（1807）6月に17歳で嫁ぎました。幼いころから和漢の学問にすぐれ、島津家への輿入れの時も、四書五經・史記などの漢籍を大量に持参し、島津家の役人を驚かせたという逸話が伝えられています。

文化6年（1809）9月に長男斉彬を、同8年（1811）4月に次男治五郎（のちの池田斉敏）、同12年（1815）に長女祝姫（のち土佐藩では候姫）をそれぞれ産んでいます。何れの子どもの時も乳母を置かず、自身の手で養育したと伝えられています。文政7年（1824）8月に34歳で死去し、芝伊皿子大圓寺に葬られました。

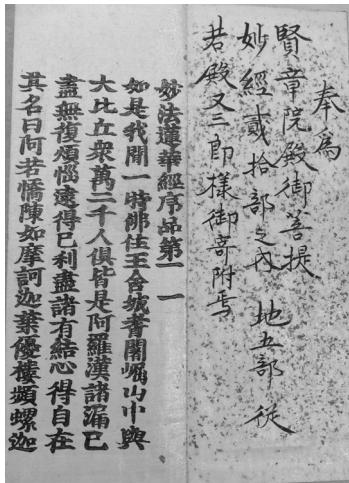
今回の調査では、賢章院の菩提を弔うために、島津斉彬を始めとする実子や賢章院に仕えた島津家の大奥などから大圓寺に奉納された経典を確認することができました。この点数は、計57点となります。

奉納された経典には、表紙の見返し部分への書き込みや奥書きなどが見られ、誰が何の目的で奉納したのかを知ることができます。例えば斉彬が奉納した経典の見返しには、次のように記されています。

賢章院殿御菩提のため、妙經式拾部のうち地五部を若殿又三郎様よりご寄附たてまつる

ここからは、賢章院の菩提を弔うために奉納する妙經（=妙法蓮華經）20部のうち、地の部

5部を若殿又三郎（=斎彬）が奉納したことがわかります。残りの法華経15部のうち、10部は天の部として義妹聰姫から、5部は人の部として次男治五郎と養女順姫から奉納されました。



法華経の見返し部分の書込み

この経典の奥書には「文政七年甲申後八月十六日」との記載があり、賢章院の死後1か月後に奉納されたことがわかります。文中の「後八月」とは「のちの八月」と読み、閏八月のことです。

同時期、島津家の奥女中たちが中心となって奉納した経典も発見されました。これらは、経典を収めていた箱も残されており、箱にもさまざまな書込みが見られます。背面上には「文政七年甲申後八月十六日」とあり、上記の法華経と同時期に奉納されたことがわかります。また、^蓋には次のように記されています。

賢章院殿御菩提のため、懺摩法本 弐十卷、
[歎]佛會本 弐十卷、[佛]遺教經 三十卷、
納主は芝大奥・高輪奥・白銀奥・三田奥・
八丁堀奥・鍛冶橋奥の御侍女檀中

ここからは、「懺摩法本」20巻、「歎佛會本」20巻、「佛遺教經」30巻の計70巻が、薩摩藩の屋敷があった芝・高輪・白金・三田の各屋敷の奥女中のほか、「八丁堀」屋敷と「鍛冶橋」屋敷の奥女中から奉納されたことがわかります。

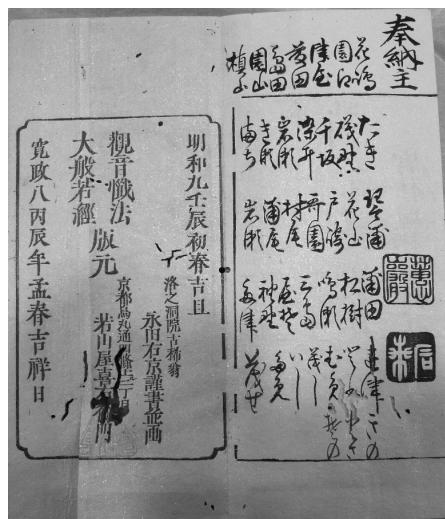
このうち、「鍛冶橋」屋敷は長女の祝姫の嫁ぎ先である土佐藩の屋敷を、「八丁堀」屋敷は養女

の順姫が嫁いだ近江膳所藩の屋敷を、それぞれ指しています。

この箱書に記された経典のうち、「懺摩法本」=「觀音懺法」を13冊確認することができました。懺法とは、自己の罪を仏や菩薩に懺悔する法会のことで、觀音懺法の場合、觀世音菩薩の前で懺悔をおこないます。その際、経文は独特的な音階をつけて読むことになっていました。

この法会は、南北朝時代（1331 - 91）に後光厳天皇が光厳天皇三十三回忌と將軍足利義詮百か日の法要に採用したため、天皇や將軍などの忌日などに當む法要となり、江戸時代以降大名を始めとする武家社会で広く用いられました。

「觀音懺法」の奥書には、奉納主として「花嶋」以下38名の奥女中の名前が記されています。ここに記される奥女中が、それぞれどこの屋敷に勤めていたかは今のところ不明です。



「觀音懺法」の奥書

名君と呼ばれた島津斎彬を養育した賢章院は、薩摩藩の中で非常に大きな存在でした。今回の調査によって、賢章院の菩提を弔うために、各方面から大圓寺へ経典類の奉納があったことがわかりました。ここに紹介した経典類は、秋の特別展で初公開を予定しています。

※大圓寺ご住職大辻徳彦師、および杉並区教育委員会の寺田史朗氏・野本禎司氏には、今回の調査にあたって大変お世話になりました。末尾ながら記して御礼申し上げます。

こうがい

笄 橋

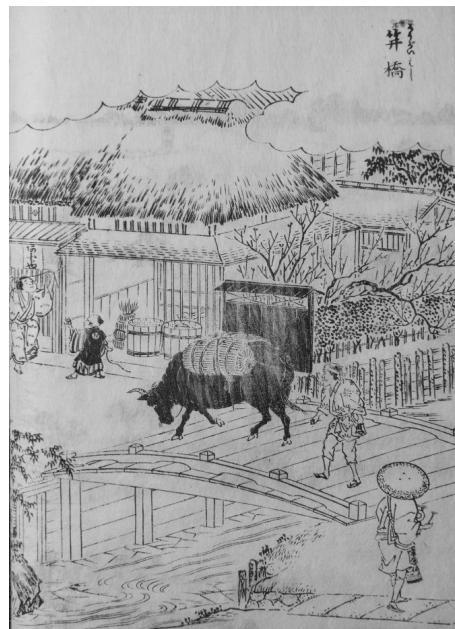
平田 秀勝

(文化財保護調査員)

港区を流れる河川・古川には、かつて、幾筋もの支流が流れ込んでいました。そのうちの一つに笄川があります。古くは龍川、親川と称する大河であったと伝えられますが、江戸時代には、蛇が池（郡上藩青山家下屋敷内の池。現在の南青山一丁目辺り）や近隣の湧き水を水源とする細流で、現在の外苑西通りの西側に沿って流れ、天現寺橋付近で古川に合流していました。笄川の上流、東西を大横丁坂、牛坂に挟まれた谷あい（現在の西麻布四丁目2・3番から10・11番）に架かる笄橋は、さまざまな地誌に取り上げられる名所として知られています。

笄橋の由来には諸説あります。「笄」とは、髪をかきあげるのに用いる髪かきや女性の髪飾り、刀の鞘の付属品のことです。『江戸砂子』には、天慶2年（939）、平将門の乱に際し、武藏国に在任中の源経基（平安時代中期の武将。清和源氏の祖）が、帰京の途中に龍川（笄川）を通りかかると、敵対する将門方の武将・越後前司広雄が関所を設けていた。経基は自分の刀の笄を味方の証拠に渡して通過したため、龍川に架かる橋を経基橋と呼び習わしたが、康平6年（1063）、経基の曾孫・源頼義が、先祖の名を憚り、鉤匙（笄）橋と改めました。この他、土地の者が訴訟を起こしたが、期待した判決が得られず後悔したため「後悔橋」。豊嶋郡小貝郷の橋のため「貝橋」（紫の一本）。恋に落ちた白金長者の若君・銀王丸と黄金長者の姫が、橋で鬼に襲われた際、目黒不動の靈験のある笄によって難を逃れた（古郷帰の江戸咄）。甲賀組と伊賀組の屋敷の境に架けた橋のため「甲賀伊賀橋」（再校江戸砂子温故名蹟誌）。鴻・鵠がいるから「鴻が谷橋」、「鵠が居橋」など、伝説や語呂合わせのようなものが多く見られます。また、『南向茶話』、『江戸名所図会』では、中世、麴

町一帯ならびに江戸より武藏国府（現在の東京都府中市）へ通じる方角を示した「国府方」という地名から、国府方村、あるいは国府方の谷あいに架かる橋で、「国府方橋」、「国府が谷橋」と呼ばれたものから転じたと考察しています。



笄橋（『江戸名所図会』より）

笄橋は明治以降も存続し、『新撰東京名所図会 麻布区之部二』（明治35年〈1902〉刊）には、

笄橋は、むかしより其の名最も高けれども、実地に就て検するに、笄川と称する一条の溝渠に架する小板橋なり。長凡そ2間、幅3間に過ぎず。

とあり、名所にしては寂しい所であったようです。しかし、この場所は、古来、現在の六本木より南青山・渋谷へ抜ける主要な道筋であったことから、行楽ではなく、交通の要所・目印としての名所であったと考えられます。

江戸の昔より名高い名所であった笄橋は、関東大震災後、笄川の暗渠化にともない、姿を消しました。現在では街並みも大きく変わり、当時の面影は失われています。

地域を見つめる観音像2

— 関東大震災の犠牲者を追悼して —

杉本 紘美

(文化財保護調査員)

愛宕山を貫く愛宕トンネルの東側にある伝叟院は江戸時代に曹洞宗江戸三ヶ寺の一つとされた名刹・青松寺の子院です。その境内には高さ1mほどの小さな仏像が立っています。

仏像は石造で、頭部に化仏をつけ、左手に蓮華を持つ觀世音菩薩像です。背後に立てられた木製塔婆には「関東大震災當院境内地殉難横死者諸精靈追善供養塔」と書かれており、仏像が関東大震災の犠牲者を供養するためのものであることがわかります。

大正12年（1923）9月1日午前11時58分、関東を襲った大地震は各地に多くの被害をもたらしました。東京や横浜では地震による建物の倒壊よりも地震後に発生した火災によって多くの人々が犠牲となり、当時は「大正大震火災」などと呼ばれました。火災の被害が拡大した原因は、昼食時で各家庭で火を使っていたことなどに加え、台風の影響による強風のため局地的な火災で留めることができず、火が強風に乗って周囲に延焼したため、と言われています。

港区での主な火災は赤坂二・三丁目、芝一丁目、高輪一丁目を火元とし、その他に銀座方面からの火災が区内に越境し、被害を受けました。中でも赤坂二・三丁目方面と銀座方面からの火災が合流し大火災となり、現在の新橋、愛宕、浜松町一帯が灰燼に帰しました。当時港区は芝区・麻布区・赤坂区の3区に分かれており、大火災の被害は特に芝区で甚大でした。芝区内の世帯の半数近くが焼失し多くの人々が犠牲になったのです。伝叟院のある愛宕山付近では、赤坂二・三丁目方面より帶状に東南へ進んだ火災が愛宕山方面へ燃え広がり、伝叟院を含む青松寺一帯が焼失しました。この伝叟院の焼跡で、芝区で亡くなった人々を火葬に付しました。

震災後、芝区震災追悼記念として、火葬場と

なった伝叟院の場所に觀世音菩薩像を建設することが伝叟院住職発案、芝区長・区内有志贊助のもとに決まります。建設費は有志の寄付により集められ、高村光雲・山本瑞雲が原型を制作し、高橋凌雲が鋳造した高さ1丈6尺（約4.8m）の觀世音菩薩像（銅造）が作られ大正15年（1926）9月1日に開眼供養が行われました。

その後も震災犠牲者供養の為に多くの人々が伝叟院を訪れます。しかし太平洋戦争が始まり、兵器製造のための金属が不足し、いわゆる金属供出が始まります。家庭の鍋や釜から寺院の仏像、梵鐘まで供出の対象とされました。現在伝叟院には石造の觀世音菩薩像が立っていることから、おそらくこの時伝叟院の銅造の觀世音菩薩像も供出されたと考えられます。

建設当初の菩薩像とは姿が変わっていますが、現在も関東大震災の犠牲者を供養するため毎年9月1日に愛宕町会の関係者が伝叟院に集まり、読経の後、黙祷が捧げられています。

震災、さらに戦災を乗り越え復興をとげ、現在はビル街となつた町に当時の面影はありませんが、小さな仏像が震災を伝える象徴としてひっそりとたたずんでいます。

※伝叟院の館寺俊明師には、調査のご許可とご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

参考文献：『芝区誌』

『読売新聞』1926年5月27日付朝刊



現在の觀世音菩薩像

同潤会アパートメント

川上 悠介

(文化財保護調査員)

同潤会というと、表参道の町並みを形成していたアパート群を思い出される方が多いかと思います。この建物は既に解体され、表参道ヒルズ（安藤忠雄氏設計）となっており、敷地東南端に、同潤会青山アパートメントの形を再現した建物、その名も「同潤館」があることから、当時の姿を窺い知ることができます。

財団法人同潤会は、大正12年（1923）におきた関東大震災の罹災者に住宅供給を行うことを目的に設立された、日本初の公営住宅供給機関です。同潤会は大正13年に設立され、震災義捐金の1000万円を元に仮設住宅の供給を行いました。この事業に一応の目処がついたところで、新たに恒久的な住宅の供給事業を二つ計画します。一つは、普通住宅事業、もう一つがアパートメント事業でした。普通住宅事業というのは、まとめて借り上げた敷地に、住宅地開発を行う事業で、大正13年から14年末にかけて東京と横浜に計12箇所を開発します。いずれも郊外を中心に敷地を選定し、長屋形式の木造住宅を一事業地に70～600戸建設しました。医院や商店などの生活に必要な施設だけでなく、公園やテニスコートなどの遊技場なども設置し、住みよい住宅地開発に取り組みます。一方、アパートメント事業は都心部に鉄筋コンクリート造の集合住宅を建設します。郊外の低層住宅地と、都心部の高層住宅という、対照的な事業を行っていたのが同潤会でした。

交通の便などの問題からか、普通住宅事業の多くは不人気でした。これに対し、アパートメント事業は応募倍率も高く人気を博したため、同潤会はアパートメント事業に力を注ぎます。大正15年9月に貸付が開始された中之郷と青山をはじめ、昭和9年（1934）8月の江戸川まで、都内13箇所、横浜2箇所の、計15箇所でこの事

業は展開されました。

同潤会アパートメントの特徴は、バリエーションに富んだ間取りや、各戸にガス、電気、水道を完備するなど、最新設備の導入、さらに、共同浴場や、集会室など、共有スペースに工夫をこらすなど、住民間のコミュニティ作りにも積極的な点です。

港区には、現在の豊岡児童館があるあたり（三田五丁目）に三田アパートメントが建設されました。全15箇所のアパートメント事業のうち、9番目、昭和3年に竣工します。敷地面積404坪の土地に、4階建て、総戸数68戸（家族向49戸、独身向18戸、他1戸）と比較的規模の小さなものでした。しかし、一連の同潤会アパートメントの特徴が凝縮されており、申し込み倍率は24.6倍と人気のほどを窺うことができます。残念ながら、この建物は昭和61年頃に解体されてしまっています。同潤会アパートメントの中で一番早い解体でした。



同潤会三田アパートメント（昭和52年撮影）

同潤会は、住宅を供給するだけでなく、集って住まう意味を深く考えていました。現代のマンションは、隣人すら知らないほど住民間のコミュニティは薄れ、大きな問題となっています。同潤会住宅には現代の住宅問題を解決するヒントが隠されているのかもしれません。

コーナー展

グラフ誌にみる昭和30年代 —館蔵資料より—

大坪 潤子

(文化財保護調査員)

グラフ誌とは、写真を主体にした雑誌のことで、画報と訳されることもあります。

国内の代表的なグラフ誌のひとつ『アサヒグラフ』は、大正12年（1923）1月の創刊当初は日刊で、同年11月から週刊で発行されました（現在休刊中）。当館では、この『アサヒグラフ』のうち、昭和31年（1956）から同33年発行分を中心とした155冊を、区民からの寄贈を受けて所蔵しています。この時期の同誌はB4版で、通常1号38ページ、表紙のほか本紙のうち見開き2ページだけがカラー印刷です。定価は50円でした。

昭和30年代といえば、近年は「昭和レトロ」の対象として、映画やイベントでとり上げられています。ややもすれば、単純なノスタルジーで語られてしまいがちなこの時代を、『アサヒグラフ』がどのように切り取っていたのか、ほんの一部ではありますが、コーナー展で垣間見ることにしました（7月2日～10月13日）。

展示は昭和31年から33年までを年毎に区切った3期構成とし、それぞれ原資料・パネルあわせて十数冊ずつを展示しました。その中からいくつかのトピックをご紹介します。

昭和31年（1956）、『アサヒグラフ』が最も誌面を割いたテーマは「南極探検」です。

国際的なプロジェクトで「学術オリンピック」とも呼ばれた南極観測への日本の参加は、国の援助が得られず難航しましたが、新聞社が支援キャンペーンを始めて多くの個人や企業が動き出し、この年11月の出航、翌年の昭和基地建設に結びつきました。『アサヒグラフ』も砕氷船「宗谷」の整備や、国内外の隊員の横顔などを、何度も伝えています（1月1日号ほか）。

さらに、ソ連との国交回復（10月）、戦後3回目となるオリンピック（メルボルン大会、11～12月）への参加など、国際舞台への復活を意識

させる出来事が続いています。「もはや戦後ではない」が流行したのもこの年です。また、家電や石油製品のPR頁が続き、これらの普及が進む様子がわかります。一方、12月30日号では、茨城県東海村の原子力研究所建設工事に伴って変貌する村を取材し、原子力を「世紀の夢」とも「わけのわからぬ怪物」とも評しています。

翌昭和32年10月4日、ソ連が人工衛星打ち上げに成功。11月24日号には、「日本の人衛星」として、東京の街にあふれる人工衛星グッズが並んでいます。またこの年は、第一回原子力シンポジウムの報告（1月27日号）、第三回原水爆禁止世界大会の報告（8月11日号）など、放射性物質に対する世論の関心の高さも記事から伝わってきます。

昭和33年は、東京タワーの建設（7月6日号ほか）と年末の完成、プロレス人気（9月21日号）、皇太子婚約（12月7日号ほか）といった、現在の「昭和30年代像」に連なる明るい話題が並びます。一方、9月に台風22号（狩野川台風）が中伊豆地方に甚大な被害をもたらしました（10月5日号ほか）。

このほか、まだ生々しい戦争の傷跡や、貧困の中で暮らす子どもなど、ノスタルジーだけでは語れない世相が、誌面には写し出されています。当時は教養や娯楽用として発行されたグラフ誌でしたが、現在では歴史資料としても位置付けることができます。



『アサヒグラフ』

昭和31年(1956)4月22日号

事業予定(平成24年10月~)

特別展 江戸の大名菩提寺

会期：10月27日（土）～12月16日（日）

会場：港郷土資料館 《入館無料》

開館時間：9:00～17:00

（祝日を除く会期中の金曜日は19:45まで延長開館）

休館日：会期中の月曜日、および第3木曜日

（10/29, 11/5, 12, 15, 19, 26, 12/3, 10）

◆展示解説（事前申込み不要）◆

11月3日（祝・土）、23日（祝・金）14:00～ 1時間程度

★資料館講座

「江戸の大名菩提寺」を実施します。

日程：①11月2日、②11月9日、③11月16日

いずれも金曜日です。

時間：18:00～19:30

会場：三田図書館3階 集会室

定員：40名 ※要事前申込み

申込みの詳細は『広報みなど』10/11号に掲載予定です。

コーナー展

・「グラフ誌にみる昭和30年代一館蔵資料より」 開催中～10月13日（土）

・「慶應義塾大学所蔵資料展（仮）」 平成25年1月5日（土）～2月20日（水）

・「武家文書一館蔵資料より（仮）」 3月22日（金）～4月17日（水）

講座など

・土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」 12月8日・平成25年2月16日

・「古文書講座」（全5回、金曜日） 2月1日・8日・15日・22日・3月1日

・「親子学習会」（土曜日） 3月9日・23日（予定）

・各事業の詳細は、『広報みなど』や郷土資料館ホームページをご覧になるか、当館までお問合せください。

・当館の刊行物の一覧は、ホームページに掲載されています。販売は、展示室横の事務室でおこなっています。

事業報告(平成24年3月～平成24年9月)

①コーナー展「考古資料に見る近代史2」～3月14日

②コーナー展「指定文化財展」 3月16日～4月18日

③コーナー展「新収蔵資料展」 4月20日～6月16日

④資料館講座「近代教育と港区2」 7月6日・13日・20日

⑤土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」

4月14日・6月9日・9月15日

⑥夏休み体験ミュージアム

「チャレンジ！縄文土器を作ろう」

7月23日・8月20日

⑦東京海洋大学附属水産資料館連携事業

夏休み学習会～東京湾 自然と人～

「東京湾の生きものたち」サンゴ礁の海と人々の暮らし

8月21日・22日

港区立港郷土資料館の利用案内

交通 JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車（A3出口）徒歩2分

都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス（ちいばす）

「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間 9:00～17:00 《入館無料》

休館日 日曜日・祝日・第3木曜日

年末年始・特別整理期間

（特別展会期中の休館日は本頁上段をご覧ください）

※特別展前後の休館日※

10月15日（月）～10月26日（金）

12月17日（月）～平成25年1月4日（金）



『資料館だより』 第70号

平成24年(2012)10月1日発行

編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 24070-7541